

[別紙 2]

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 山本伸幸

本論文は、環境資源勘定や社会会計行列といった勘定体系の概念に主に依拠し、森林と社会という異なるシステム間の相互依存性の包括的把握について考察したものである。本論文は大きく3部から構成される。

第I部は森林と社会の相互依存性を包括的に把握するための体系として、森林資源勘定について論じ、その有効性を明らかにした。以下の3章から構成される。

1章では、現在の日本の森林調査および関連統計の現状および問題点について、諸外国の比較を含め概観した。その上で、そうした問題点を克服する体系としての、森林資源勘定の意義を論じた。また経済全体との関連の視点から、産業連関表と森林資源勘定の関係についても論じた。

2章では、森林資源勘定のこれまでの発展に先導的な役割を果たしてきたヨーロッパの経験について、近年の成果である、森林に関する欧州版経済統合勘定に焦点を当てて論じた。そうした分析を踏まえて、日本における森林資源勘定の今後の発展を展望した。

3章では、森林資源勘定利用の一例として、木材利用の国際比較を行った。具体的には、日本、東南アジア諸国、欧州諸国、アメリカ合州国について比較した。日本との関係を考える際に重要であるアメリカ合州国については、既存の勘定が存在しないため、ジョージア州について新たに構築した。また、これらの分析を通して、温暖化問題における排出源、吸収源問題のアカウントイング問題への森林資源勘定の寄与について展望した。

第II部では、森林と社会を媒介する場としての土地に着目し、土地を通じた相互依存関係の包括的把握について論じ、その特性を明らかにした。以下の2章から構成される。

4章では、土地勘定をキー概念として、森林と社会を媒介する場としての土地について、勘定体系で把握する際の方法について考察した。また、特に土地統計システムの発達している欧州諸国を中心に、諸外国の土地関連統計システムについて論じた。

5章では、日本で土地を媒介に森林関連統計を整備していく際に重要となる、森林計画情報と地籍情報の整合性および相互利用可能性について、島根県羽須美村を対象に実証的な分析を行った。

第III部では、森林と相互依存関係にある社会について、社会経済システム内部の記述に新たに必要とされる視角について論じ、今後の発展を展望した。以下の2章から構成される。

6章では、森林の利用・管理を行っていく際に、その基盤となる農山村の存立構造を探ることが重要であるとの立場から、従来の地域産業連関表を批判し、農山村社会会計行列（農山村 SAM）という概念を提起した。また、第 I 部および第 II 部で論じた森林資源勘定、土地勘定と農山村 SAM との関係について、農山村 SAM の環境への拡張の視点から考察を加えた。

7章では、レクリエーションやボランティアなど、現代の森林セクターにおいて重要性を増してきているが、市場システムだけでは十分に捉えきれない事象について、その把握の可能性を探った。まず、CVM など環境経済学分野で多く用いられる環境評価手法について、その限界を論じた。そして、一つの手がかりとして、Fisher の「富」概念および Juster の「富」概念に基づく勘定体系の検討を中心に、新たな把握の可能性について考察した。

以上のとおり、大別した 3 部において、いずれも森林と社会の相互依存性とその把握について議論が行われたが、それぞれの焦点は異なる。まず、「I 森林資源勘定」では、森林で成長する樹木そのものと、森林から社会に供給される木質資源に焦点を当てた。「II 土地の包括的把握」は、林地に関する議論であった。その際、農地や都市的利用など、森林以外の土地利用との関係も考察された。「III 社会システム把握の視角」では、貨幣システムを考察したものである。ここでは、森林セクターと農山村経済の関連や非市場的価値について議論された。

以上、本論文は、森林資源勘定や社会会計行列といった勘定体系の理論に依拠し、木質資源、土地、社会システムという 3 つの視角から、森林と社会の多彩な関係の各側面を描き、それを併せ見ることによって、複雑な両者の相互依存性を浮き彫りにするという意欲的な試みであり、学術上・応用上貢献するところが少なくない。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。